

森田正馬・福来友吉と催眠

著者	大宮司 信, 森口 眞衣
雑誌名	北翔大学生涯学習システム学部研究紀要
巻	14
ページ	23-31
発行年	2014
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00000180/

森田正馬・福来友吉と催眠

Masatake Morita, Tomokichi Hukurai and hypnosis

大宮司	信	森口真衣
Makoto	DAIGUJI	Mai MORIGUCHI

1. はじめに

森田療法の創始者である森田正馬は、日本が近代化を進めている時期、当初催眠に傾倒し、実践し、論文を著し、この領域に少なからぬ貢献をしたにも関わらず、その後催眠から離れてしまっている。同じような道筋をたどった同時代の研究者に福来友吉がいる。

本論考ではこの福来をいわば対照として、森田と催眠の関係についてとりあげ、次いで森田および森田療法成立における催眠の位置について主に催眠の持つ二つの側面から考察する。まずこの二人が活躍していた時代の催眠に関する状況を一柳¹⁾に依拠して簡単に提示する。その後、森田・福来の個人史及び催眠との関係を、森田の場合は主に日記³⁾と野村による評伝⁶⁾、福来の場合には2冊の評伝^{4) 7)}から紹介する。

野村によれば、森田は中学時代の1893年（明治26年）12月の冬休みの旅行記から日記をつけはじめ、四六版ノート36冊に及んでいるという（野村⁶⁾：305頁）。しかし森田正馬全集³⁾に収載されているのは、そのすべてではなく、野村⁶⁾はこの全集収録の日記以外の出来事も一部記載している。

福来に関してはさらに制限がある。福来の自筆資料の多くは戦災で消失してしまったため、一次資料的な日記や行動記録は、著者は存在の有無を含めて知ることができなかった。上述した2冊の評伝も、伝聞や弟子としての思い入れなども入っていると思われる点を考慮しておくべきであろう。いずれにしても、森田・福来両者の事績の検討に関して、本論考は一定の制限を有している。

2. 明治・大正期の催眠

明治の中期から大正の初期にかけて、日本では民間で催眠術が大流行した。一柳は、その原因はおそらく、科学が発達して万事を物理的に解釈しつつあった時代に、催眠現象が一見して不可思議で、人々が科学の及ばない神秘的なものに魅力を感じたからであつたろうという（一柳¹⁾：61頁）。

しかし治療と称して見せ物にしたり、果ては犯罪まで行われるといったありさまとなったり

したため、催眠には当然様々な警鐘や反対が起こった。森田・福来もそういった警鐘を発したが、やがて、催眠術の取り締まりを項目に加えた「警察犯処罰令」が1908年（明治41）年9月に施行され、「濫ニ催眠術ヲ施シタル者」は拘留や料料の対象となり、表面的には落ち着いていった。

民間の流行とは別に、医学の中の催眠は東京帝大内でも教授されている。榊俣が東京帝国大学精神病学教室員に催眠の実習をおこなったのは1892年（明治25年）といわれているが（一柳¹⁾：18頁）、これは森田・福来の帝大入学のそれぞれ6年および4年前のことである。その後大正期となると、催眠は色々の理由から変質を余儀なくされたが、その結果精神療法や新宗教のなかに移行し溶け込んでいくことになる。

3. 森田正馬と福来友吉の個人史

森田・福来が生を受けたのは日本の近代化が始まった明治のはじめであった。森田は1874年（明治7年）、福来はそれに5年先立つ1869年（明治2年）に生まれている。後に東京帝大に進むくらいだから、人並み以上の知力の持ち主であったろう。

森田の幼少時代で有名なのが9歳ころの近くの寺でみた地獄絵の恐怖のエピソードであり、彼の宗教・哲学への志向や、森田療法における「生への欲望」はこのあたりにも根ざすと考えられる（注－1）。

一方、福来はなかなか勇敢で、また俗信にとらわれぬ少年であったらしい。福来の幽霊退治の話が中沢⁴⁾によって紹介されている（注－2）。また宗教や哲学への志向も少年時代から培われたという（注－3）。

森田が生を受けた高知は憑きものの俗信の盛んな地方であった。彼が最初に表した論文は「土佐の犬神憑き」である。その基礎となった調査は当時の上司であった榊からの命であったというが、彼の土佐への調査行は、野村によればいわゆる故郷に錦を飾るといった体であったという⁶⁾。

憑きものは病気のひとつであるという近代的な精神医学による俗信の解釈は、のちの祈祷性精神病にまでいたる森田の志向を物語るものであろう。この点に関して、野村も次のように述べている。「彼（森田）は青年時代から宗教にはつよい関心をもっていたし、神道の祈祷にも興味をもっていたことは、犬神憑きの調査以後、祈祷性精神病の研究を興味をもって追究していたことでもわかる。これは、超心理学的現象を科学的に身心（ママ）相関の理にもとづいて究めようとするものであった」（野村⁶⁾：123頁）。

福来の育った飛騨にも「牛蒡種」（ごんぼだね）という俗信がある。牛蒡種という人間の霊が乗り移り憑りつくという俗信で、動物憑依が多い日本の憑依の型とは異なるところが特徴である。山本によれば福来が催眠を目指したのは牛蒡種との関係があるという（注－4）。

二人は共に東京帝大に入学する。卒業後、森田は母校の助手をはじめ、いくつかの教職を経て、1925年（大正14年）に現在の慈恵会医科大学の教授に就任する。また彼はそのかなり前の

1912年（明治45年・大正元年）に自宅開業して診療を開始している。

一方福来は卒業後、心理学の助教授（1908年（明治41年））に就くが、有名な千里眼事件で退職を余儀なくされる（1915年（大正4年））。東京帝大を辞したあとの福来は消息は一時期とだえるが、その後女子高の校長を経て、1926年（大正15年・昭和元年）高野山大学教授として迎えらる。

森田の死は戦前の1938年（昭和13年）であるが、福来は戦後まで生き、1952年（昭和27年）に亡くなっている。

4. 森田正馬と催眠

森田が催眠に興味を抱くようになったのはおそらく1903年（明治36年）に東京帝国大学助手に就任した前後からと思われる（注－5）。このころから催眠に対する講義をおこなったり実践したりしている。

彼は後年になっても催眠に対する講義、実践あるいは論述を大小となく行っており、見い出せるものだけでも死の数年前までかなりの期間にわたり、様々な所で言及している（注－6）。また催眠の悪用・乱用や悪質な精神療法へは厳しい批判を加えている（注－7）。

しかし彼は催眠ではあきたらず別の方向へ向かう。精神療法の第一歩としては催眠療法に専念したが、やがては神経衰弱の療法としての森田療法を創始するのである。彼は1915年から1919年（大正4年から8年）までの間に多数の症例をあつかって、神経衰弱症を神経質とよぶことが正しいという理論に到達する。

森田は次のように述べている。「神経質の病的心理を説得する療法も、すいぶん熱心にやった。赤面恐怖に対しては、半年も一年も催眠療法と説得療法とを併用して熱心に治療にあたったが、私も根まけして閉口すれば、患者の方もくたぶ（ママ）れていつとはなしに中絶してしまった。それで赤面恐怖などは治らないものと一時はあきらめたこともあった。……（中略）……

私が神経質の苦悶のつよいものに用いた絶対臥褥法は、意外にも著効をおさめた。それから今日用いている森田式技術が、神経質の根本療法として出来上がったのであった。」（野村⁶⁾：142～143頁）。

このように森田は、のちの神経質及び森田療法につながるような治療法の確立を目指す過程で催眠療法を乗り越えたと考える。また超自然的な要素は認めず、もっぱら人間心理の具体的な事象及び治療法のひとつとして、あるいは森田療法との関係において催眠及び催眠療法を語る。これが彼が催眠及び催眠療法について長く言及を続けた理由ではないかと考える。

彼にとって催眠は一つの一里塚であり、のちに振り返ってみてそれなりの意味付けはできるが、森田療法に到達した地点からみれば不十分な治療法と映ったのであろう。晩年までの催眠への言及から見れば、評価は低下したものの、催眠に対する関心が全く失われたわけではないと考える。

5. 福来友吉と催眠

福来が東京帝国大学の心理学講座で目指した催眠研究は、単に物理現象としてでない生きた精神現象を求めた方向をもつものと思われる。森田のように福来もまた師の元良勇次郎の意を嗣いで、民間の催眠術へのアプローチに警鐘を鳴らし、学術的な研究の必要性を強調した。

福来は東京帝大在職中に、催眠に関して多くの著作をなすが（小泉²¹⁾、なんといってもその集大成である「催眠心理学」が頂点であろう。欧米の当時の最新の研究状況をふまえ、膨大な実験データを整理しており、後代にも高く評価されている。

この時期、福来はまた個人的に催眠療法を随分と試み実践していたようである。小泉²¹⁾によれば、とくに教育方面に関する催眠の応用に重点を置いていたという。

同時に彼は催眠中の被験者に超心理的な現象が現れることに気づき、ここから透視（千里眼）、予知、さらに進んで念写などの研究に目覚めていく。これが1909年（明治42年）の千里眼、御船千鶴子との出会いにつながる。以後福来はもっぱら千里眼と念写に重点を置くようになり、催眠は捨て去られることになる。そして有名な千里眼事件ののち彼は東京帝大を去ることになる。

その後の福来の動向は一時不詳だが、中沢によれば、福来は高野山にこもり、夜は宿坊に泊めてもらい、昼は奥の院で修行に励んだという。その目的は、自分自身が超能力を得るため、自ら念写ができるようになれば理想的だが、そこまで行かなければ透視でもよいと考えていたという（中沢⁴⁾：136頁）。

彼が学問の世界から身を引いていったのは1919年（大正8年）以降の高野山での修業に入るところからであろう（小泉²¹⁾）。これ以降彼は催眠だけでなく学問的な研究の世界から姿を消し、超能力や宗教の世界へと方向転換していく。「催眠術研究の第一人者だった彼が、なぜ『千里眼』の証明に全精力を傾けることになったのか。その理由は、催眠術によって顕在する解釈しがたい現象を『科学的に説明するためだった』と一柳は言うが（一柳¹⁾：146頁）、山本によれば後年、福来は若いときの研究を振り返って次のように言っていたという。「私の古い著書などは読んで頂かない方がかえってよい。催眠心理学（明三九）や心霊と神秘世界（昭七）などからみると今日の考えは全く変っている。生命主義の信仰（大一二）、あれも今日からすれば幼稚なものだ。」（山本⁷⁾：219頁）

6. 森田療法の成立における催眠の位置

1774年、痙攣発作の女性を治療していたメスメルは、彼女の足に磁石を当てると症状が沈静化するのを発見した。彼はこれを自分の身体の内から発した磁力の作用によると考えた。つまり磁石は伝導体であり、メスメル自身が治癒作用を引き起こす力を持った本体であるというのである。そして磁石にS極とN極があるように人体にも正反対の両極がありそれらが伝達しあ

うと考え、これを「動物磁気」と呼んだ。

次いでメスメル弟子ピュイセギュールは1784年、「磁気催眠」という現象を発見した。彼は磁気治療中の患者が術者へ注意を集中し、暗示に対して疑問を挟まず従順にすると磁気催眠が生じ、それからさめると治療中の出来事を忘れることに気付いた。もちろんこれは後の催眠トランスである。

この動物磁気催眠の発見以降、以上述べてきたような考え方、すなわちメスメリズムは急速に心霊的世界に接近していく。そして密閉された箱の内部の物体を見ることができる者や、未来を予見するテレパシー的な能力を発揮する者が出現したという。

やがて動物磁気催眠が引き起こす多種多様な超常現象は、現実世界においては手の届かない世界へ至る道を暗示し、メスメリズムは科学を超える道を示すとみなされるに至る（一柳¹¹⁾：11～12頁）。

オカルティックなメスメリズムに対して、催眠現象を大脳内部の生理学的な作用であるとし、新たにヒプノティズムと命名したのは、イギリスの外科医ジェイムズ・ブレイドである。彼によって催眠研究は近代科学の領域に引き寄せられ、1880年代にいたって、フランスを中心に最盛期を迎え、実験心理学、生理学、精神医学、精神分析の内部に取り込まれていく。

このように一方で催眠にはメスメリズムに基づくオカルティックな側面がある。近代心理学に立って催眠を研究していた福来が、透視や念写という方向へと転じてしまったのは、催眠のもつこの面への転向・傾倒と解釈できるのではないか。

森田も超自然的現象に興味を持たなかったわけではなく、例えば1907年（明治40年）6月には千葉の精神病者の祈祷による治療を見学している（注－8）。また1918年8月に透視及び念写の超能力を持った者の募集が創設1年を経た日本精神医学会によって行われたとき、森田は中村古峽とともにその判定に携わる審判員をしている（変態心理⁵⁾：4巻2号（通22号）199-201、大正8月1日発行、なお注－9参照）。

催眠を人間の心理的、生理学的な現象として把握しようとする自然科学的方向、すなわちヒプノティズムは、精神療法の中で自覚的・普遍的な方向を目指した森田の志向に一致するように筆者には感じられる。

このように、催眠に関する森田・福来両者の違いは、催眠をメスメリズム・ヒプノティズムのどちらにより強く志向したかによるのではないかと筆者は考えるのだが、根っからの精神療法家・治療者である森田には、何にもまして現実の世界が大事であり、福来のように超現実の世界へ身を投じていくことは出来なかったであろう。森田・福来の両者が互いに相手をどう見ていたのか知りたいところだが、現在までのところ筆者はそれを示す資料に出会っていない（注－10～12）。

【注】

注－１：森田の有名なエピソード（森田³⁾：766頁）

九才カ十才許ノ時ナリケン、村ノ寺ニテ極彩色ノ地獄ノ繪ヲ見タルヨリ後、屢々死後ノコトヲ思ヒ死ヲ恐レ夜睡ル能ハズ、夢ニウナサレタルコトナダアリキ。タメニ中學時代ニモ宗教的ノコトニ心ヲ傾ケ、又奇術、奇蹟、其他迷信的ノコトニ深キ興味ヲ有シ、呪咀、ト占、骨相、人相等ノ書ヲ愛シタリ。而シテ將來ノ希望トシテ哲學ヲ志スニ至ル。

注－２：福来の幽霊退治のエピソード（中沢⁴⁾：42頁）

友吉少年の幽霊退治の話がある。彼が十二歳のある日、高山町山王神社から江名子村へ通じる峠に幽霊が出るという話が伝わり、彼はその正体を確かめるべく、一人で現地の森の中へ入って行った。すると、なるほど白い姿のそれらしいのが出現したので、近づいてよく見ると、町の悪童数人が白い着物を棒につるして出て来て、通行人が驚き逃げるのを見て喜んでいるにすぎない。友吉少年はさっそく悪童たちと格闘して取り押さえ、今後は幽霊のいたずらをやめることを誓わせた。

注－３：山本はつぎのような福来の少年時代のエピソードを紹介している（山本⁷⁾：90頁）

道々、出迎えに来てくれた祖父久右衛門から死に神の話を聞いたのでした。「この道から酒に酔った男がころがり落ちて死んだ。それから、また車の輪が道からはずれて荷と一緒に落ちた男が死んだ。ここには死に神がいて人を引きつけて死なせるんだよ。死に神に引かれぬように用心して通らにゃ、いかんよ。」云々。福来少年は、これに類する話をよく聞かされたのです。人が死んだら魂はどうなるか、あるとすれば、どうやって証明できるか、死に神とは果たしてあるか、ないか？それについて研究したいと思っていたのです。福来少年が大学で哲学や心理学を研究したいと情熱を燃やした直接の動機はこの頃に萌芽していたのです。

注－４：福来と牛蒡種（山本⁷⁾：87頁）

飛騨には「ごぼう種」と称する迷信が古来からあって、現に生きている人の霊が憑依し病ませると信じ恐れられています。このごぼう種は血統（すじ）であると信じられ、その家の子女は結婚の相手を得るに苦労しました。「あの家はごぼう種の血統だから、あの家の婆さんに憎まれると念がとりついて病気になる」と信じていると、それが予備暗示になって、半醒半眠（うっとり）の時、或いは熱に浮かされている時などに一種の催眠状態を自から醸し出して「婆々（ばば）が首しめる!! 苦しい苦しい。」などとわめいて七転八倒する事を福来青年は知っていたのです。

注－５：1903年（明治36年）の記録として野村は次のように記録している。これらは森田が催

眠に接するようになった時期を示すとともに福来との接触を示す初期の記録でもある。

「七月一日（水）大学の心理学実験室で、福来友吉氏の催眠術実験を見る。」（野村⁶⁾：77頁）。

また同じ野村による次の記載も、同一の時期の体験を述べたものとする。

「一方、文科大学の講義を聴いて、心理学の勉強に力を入れている。福来友吉教授（ママ）の催眠術の講義、松本亦太郎の講義で、はじめてスライドをみせられてびっくりしている。」（野村⁶⁾：73頁）。

注－6：森田の日記に出てくる催眠の施行・講義・講演は下記

1. 1904年（明治37年）6月10日（森田³⁾：776頁）
慈恵院學生ニ高瀬夫人ノ催眠術臨床講義ヲナス。
2. 1904年（明治37年）7月6日（森田³⁾：776頁）
藝備醫學會催眠術ノ講演ヲナス。
3. 1909年（明治42年）5月19日（森田³⁾：784頁）
三田定則氏父君ニ催眠術ヲ教授ス。
4. 1909年（明治42年）12月19日（森田³⁾：785頁）
國家醫學會ニ催眠術ノ講演ヲナス。
5. 1911年（明治44年）12月17日（森田³⁾：786頁）
鷹城會ニ催眠術ノ講演ヲナス。
6. 1917年（大正6年）7月5日（野村⁶⁾：129頁）
中村君と神經衰弱者吉田を呼びその他健康者五人に催眠術を施す。
7. 1918年（大正7年）8月10日（森田³⁾：791頁）
變態心理會ニ「催眠術ニ就テ」演説ス。
8. 1928年（昭和3年）12月1日（森田³⁾：810頁）
病院、慈大臨床講義ニ催眠術ノ講義ヲナシ、あや子及女中はるヲ供覧ス。上出來ナリ。
9. 1929年（昭和4年）2月10日（森田³⁾：813頁）
古関君ニ催眠術ヲ指導ス。
10. 1934年（昭和9年）4月22日（森田³⁾：840頁）
第四回十三回形外會。四十九人、催眠術ノ講演ヲナス。

注－7：森田の催眠に代わる療法への批判（1921年（大正10年）ころ。（森田正馬：精神療法の基礎（変態心理⁵⁾，大正10年1月発刊））

催眠術は一時盛んな流行のようになって、其価値は大分誇張されたが、此頃次第に下火になった。然るに之に代って此頃多く有害なる迷信に陥る処の種々有難そうな名目を以てする処の諸種精神療法（太霊道、リズム学、気合術、念射療法等の如き）が益々流行するようになった。

之は要するに一般の人に慣れて余り難有（ママ）味のなくなった催眠術の名を代え、心霊という仮面を被ったという迄のものである。総て是等の類は皆一の暗示療法であって、其原理は皆呪咀禁厭と同一のものである

注－8：野村は1907年（明治40年）6月2日の森田の次のような記録を残している。（野村^{6）}：105頁）

その帰途には、中山の法華寺（現市川市内）に立寄って、精神病者を祈祷で治すという噂を知っていたので、自分から祈祷依頼者となって寺の様子を探訪したりしている。少しの時間も無駄なく自分の研究のためにつかう好奇心と行動性がうかがわれる。

注－9：超能力者募集の結果

募集の結果であるが、応募したのに面接に来なかった者のほか、「無能力者2名、精神病患者1名」という結果であったという（変態心理^{5）}：5巻4号、455頁、「編輯の後に」）。

注－10：森田と福来

著者が現在まで調べた限りで、福来が森田について言及している記事は見いだせなかった。先述したとおり、かなり多数の福来自筆の研究資料が戦災で消失しており、記録があったとしても消失している可能性が否定できない。一方森田に関しては1903年（明治36年）、東京帝国大学助手になった年の7月に福来の催眠実験を見たとの記述がある（注－5）。また福来が東京帝大を退職した2年後の1917年（大正6年）6月24日には福来友吉の自宅にて、中村という人物の催眠を見学した記述があり（注－11）、福来が東京帝大を退職したあとも福来の自宅まで赴くような交流があったと思われる。この同じ6月には日本精神医学会が立ち上げられ、福来も森田もその評議員として名を連ねているので、この会かあるいは中村古峽を間にして福来と森田のつながりがあったのかもしれない。なお日本精神医学会が創設された1917年（大正6年）9月に、福来によって行われた念写実験に森田が立ち会っていた可能性を示す記載があるが、確認にまでは至っていない（注－12）。

注－11：森田と福来（野村^{6）}：125頁）

「二十四日（日）夜、福来友吉氏宅に中村氏の催眠術を見る。」

（1917年（大正6年）6月。「中村」は「中村古峽」ではないかと考えている。）

注－12：この点に関して類似の記載が3点ある。ただし日付・人名・場所などが微妙にことなっており、同一事項の記載の誤りか、あるいは別々の内容か、さだかではない。

1. 野村^{6）}：124頁

……古峽の仕事に全面的に賛成であったものと思われる。そして一緒に信州上諏訪の三

原という人の念写の実験にも同行し、……

2. 山本⁷⁾：120～121頁

大正六年九月二十九日、福来と三田は連れ立って長野県へ旅行し、飯田町の巴旅館に投宿した。その夜、福来の友人森が来訪し、その立ち会いのもとで、念写実験がなされた。

3. 森田³⁾：790頁

九月二十六日、中村君ト同行、信州上諏訪ニ三田ノ念寫ヲ見ル、歸途高尾山ニ遊ブ。

【文献】

1. 一柳廣孝：催眠術の日本近代. 青弓社, 東京, 2006
2. 小泉晋一：福来友吉の催眠研究に関する文献調査. 催眠学研究, 54：12-19, 2012
3. 森田正馬：森田正馬全集第7巻. 白揚社, 東京, 1974
4. 中沢信午：超心理学者福来諭吉の生涯. 大陸書房, 東京, 1986
5. 日本精神医学会：変態心理 (復刻版). 大空社, 東京, 1998
6. 野村章恒：森田正馬評伝. 白揚社, 東京, 1974
7. 山本健造：念写と Dr. 福来. 星雲社. 東京, 1992

(付) 本論文の要旨は第59回日本催眠医学心理学会 (2013年, 高山) 及び第17回日本精神医学史学会 (2013年, 東京) にて発表した。なお注-9 については小泉晋一先生 (共栄大学教育学部) よりご教示いただいた。記して感謝する。